

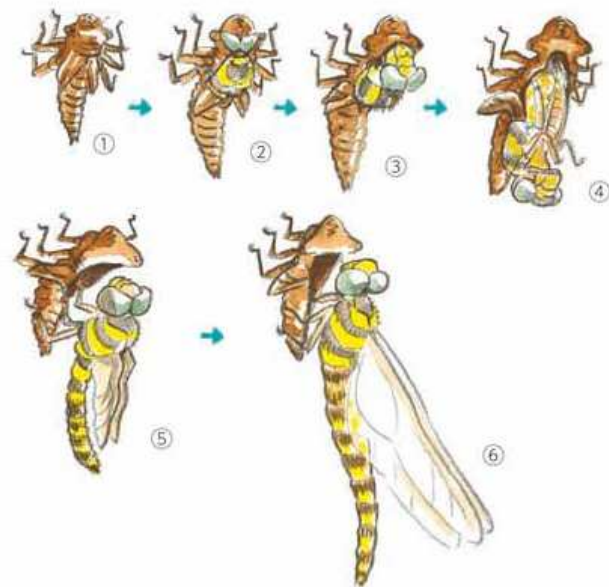
オニヤンマになってからも、危険や危機がついてまわりました。危機はオニヤンマになった、その日からおこったのです。

よく晴れた夏の夜のことでした。キコ丸君は最後の脱皮をするために、川底の、どろまじりの砂からはいだしました。岸辺にあがり、小さなヒマワリのような花のさく、ヒメジョオンという野草の根もとにたどりつきました。その根もとから、くきをのぼり、ちょうどいい高さの場所を見つけて、背中が割れるのを待つことにしたのです。

キコ丸君がまわりを観察すると、となりのくきにも脱皮をしようとしているヤゴがいました。となりに同じ仲間がいるとわかり、キコ丸君はなんとなくうれしくなって、最後の脱皮もじょうずにできそうだと思いました。

いつのまにか東の空が明るくなりかけています。もうすぐ夜明けです。脱皮を急がなければなりません。明るくなると、天敵に見つかりやすくなるからです。

野草のくきにしっかりつかまって待っていると、やがて背中が割れてきました。そうすると、キコ丸君は自分の脱皮のことに夢中で、となりにいる仲間のことなど、すっかりわすれてしまいました。



まず頭を、からからだして、次に胸をぬきだしました。そして、胸から続く細いしっぽの番です。じつはしっぽではなく、おなかなのですが、そこを3分の1ほどぬいたとき、体があおむけになってしまいました。さかさぶりのような状態です。このままの体勢で残りの部分をぬくと、地面に落ちてしまいます。

そうすると、まだちぢんだままの体や羽をピンとのばせなくなり、死んでしまいます。キコ丸君は、ありったけの力をこめて、体をかがめるように上にあげ、ぬけがらの頭にしがみつきました。これで地面に落ちる心配はありません。キコ丸君は残りの3分の2のおなかをぬきだし、無事に最後の脱皮で羽化（昆虫のさなぎが成虫になること）をなすとげたのです。